

兵庫県ワシントン州事務所

インターンシップ報告書

理学部 2回生

吉本 将隆

実施期間：平成 29 年 2 月 15 日（水）～4 月 1 日（土）

● インターンシップの研修内容

今回のインターンシップでは様々な場所で様々な体験をさせて頂いた。その研修の場所と内容を下記にまとめた。

- ・兵庫県ワシントン州事務所（日々の業務：Sakura-con の企画・当日に向けた準備、電話対応、来客対応 等）
- ・四つ葉学院（日々の業務：土曜補習授業プログラムお手伝い、採点業務、平日の補講のサポート、中学生に対する授業 その他：理科の実験プログラムの企画・準備・実施、保護者との面談・インタビュー、Medina Elementary School にて 4 年生の理科の授業参観 等）
- ・ワシントン州日米協会（Japan in the School のボランティア活動）
- ・会社訪問（川崎重工・JAL 等）
- ・ワシントン大学（日本語現代文学・文化人類学の講義・Tadoku Club に参加、ラボ見学等）
- ・その他（グローバル教養海外実践（アメリカ）のプログラムに参加、日本公邸にて神戸市とシアトルの姉妹都市提携 60 周年のレセプションに参加 等）

● インターンシップに必要な英語力・スキル

英語に関しては、**何をするのかにもよるが、そこまで高いレベルが必要というわけではなく、大学受験レベルの勉強をしていれば最低限大丈夫**だと思う。勿論英語を沢山使う場面もあるのだが、上記に書いてある研修内容を見てわかると思うが、意外と日本語が使える環境にいることも多々あった。インターンシップを終えて振り返ってみると、私が日本語の環境下でインターンシップをすることになった理由として大きく 2 つ考えられる。1 つは渡米前の英語力の問題とインターンシップの期間である。1 年間の長期留学やインターンシップとは異なり、一般の日本の大学生程度の英語力と、理系の学部 2 年程度の専門性で春休み 1 ヶ月半程度の期間で英語のみの環境で研修先を探しても、そうそう簡単に見つからない。実際に渡航前に様々な場所に連絡を取ることを試みたが、返事しないことが多々あった。また、もし仮に英語のみの研修先が見つかったとしても英語力という大きな障壁があるために、英語以外のものを研修中の短期間で学び取るのは難しい。もう 1 つは、兵庫県ワシントン州事務所（以下、事務所と略記）でインターンシップを受け入れてもらっていたことである。事務所のつながりや紹介により普通ではできない経験を沢山させて頂いた。兵庫県ワシントン州事務所はシアトル近郊において日本を代表する機関の 1 つであるので、

シアトル近郊の日本企業や団体と多くのコネクションを持っている。実際に、四つ葉学院以外での研修はほとんど事務所に調整頂いたものである。ボーイング工場では、完成間際の機体に乗し、通常ではできない貴重な経験もさせて頂いた。このような2つのメリットにより自然と日本語環境になったのかもしれない。また、シアトルはアジアから一番近いアメリカということもあり、比較的アジア系の人々が多く、シアトルの英語の発音は十人十色とは言い過ぎかもしれないが、様々な訛りの英語話者がいる。それ故、熱心に私の英語も聞いてくれた印象を受けた。そのため、英語力に関しては**過度に心配しすぎる必要はない**と考えられる。

スキルに関しては、人として、日本人として**最低限の礼儀やマナーとインターンシップから何かを学び取りたいという意欲**、そして**時には楽しむという意識**が大切だ。まずは礼儀やマナーについて、我々大学生は本人たちが考えている以上に礼儀やマナーが欠けていることが多いと感じる。このインターンシップは兵庫県立大学を代表して行くことになる。そのため、現地に行くと兵庫県立大学の代表として見られることは勿論、時には事務所の代表、そして現地のシアトルの方々や接するときには日本人の代表（例）として見られることさえもある。そのため、礼儀やマナーがしっかりしていないと兵庫県立大学、事務所の印象が悪くなってしまい、迷惑がかかり、来年度以降のインターンシップの後輩にも影響が出てしまうことも考えられる。そのため最低限の礼儀やマナーは必要である。

意欲に関しては、このインターンシップをより良いものにしていくためには必要不可欠であると思う。シアトルでのインターンシップの1番の魅力は、自分で自由に研修内容をカスタマイズできるところである。これをしっかりと生かすためには事前に自分がしたいことを入念に熟考し、その内容を予め事務所や大学に伝えるとともに、自分で興味のある場所に連絡をしてみるという行為が大切だ。また実際に研修を行う際にも、ただやっつけ仕事で研修するのと、意欲をもって研修するのでは学び取れるものは大きく変わってくる。意欲がなければ、このインターンシップが「旅行+α」程度のものになってしまうもおかしくない。

時には楽しむということに関しては、おそらく他のインターン経験者も言及しているだろう。上記の意欲で堅苦しいことを述べたが、それだけでは辛く、心が折れてしまうこともある。そのため、高い意欲は持ちながらも、現状を楽しみ、週末はしっかりと自分のやりたいことをすることも時としては必要である。だが、楽しむことを主においてしまい過ぎるのはインターンシップとして本末転倒なのでそこには注意したい。

● インターンシップで得たこと

インターンシップで得た事は沢山あるが、ここではその一部を例として3つ紹介したい。

まず1つ目は**海外で生活し、仕事をすること**はどのようなもので、**そのためにはどのようなことが必要なか**ということを行く前より具体的に知ることができたことだ。私は今回のインターンシップを経験するまでは海外生活をほぼ体験しておらず、実際に1ヶ月半生活したことによって、**英語環境下にある程度慣れた**ということは得られた大きなことの1つである。学生時代にある程度慣れておくことにより、もし将来急に海外に行くことになったとしても心

的不安が大きく緩和されるからだ。見知らぬ土地でホームステイ先を探したり研修内容を1から組み立てた経験も大きかった。また、実際に川崎重工やJAL、四つ葉学院の方々等、海外で実際に働いているの方々のお話を伺うことにより駐在者の内部事情やどのような経緯でシアトルに来ていて、海外勤務をしたい場合にはどうすればよいのか等も把握することができた。

2つ目は海外事情（主にアメリカだが）を知り、日本と比較し、様々な考察を加えることにより、**自分が今後どのように学び、成長することが必要かを感じ取ることが出来たこと**である。その具体例の1つとしては**英語との付き合い方**である。現地で活躍なさっているたくさんの方々の日本人の方々とお話をさせて頂く機会があり、その都度英語に関する話を伺った。英語については人それぞれ様々な見解があったが、全員に共通していると感じるものが1つあった。それは、結局のところ、**英語に関しては現地に行ってから対応しなければいけない部分が少なからずある**ということである。当たり前なことだが、英語は世界の公用語という特殊性を持っており、多種多様な言語でもある。そのため、第2言語として英語を修得した我々日本人にとって、渡米前に現地の訛りにあらかじめ対応するには限界があるということである。これは基本的にはリスニングとスピーキングの際に現れる。ただ、これは**日本における英語の勉強は意味がない**ことを言っているわけではない。

3つ目は**人として、教育者として必要な資質や知識を体感し、学ぶことが出来たこと**である。ここに関しては四つ葉学院の方々に大変厳しく指導していただき、非常にお世話になった。四つ葉学院はシアトル近郊の位置する塾と学校の融合という新しい形の教育を提示している日本人学校である。教職課程を履修していることが四つ葉学院にお世話になるきっかけとなった。ここで学んだことは沢山あるが、主なことを3つ紹介したい。1つ目は**海外で生活している日本子女と触れ合うことより、彼らの現状を知ることが出来たこと**だ。海外の日本子女は我々が思っている以上に予想外の環境に置かれている。両親が日本人であっても私の予想以上に日本語がつかなく、日本人としての気質・文化などをしっかり体感できていないことが多々見受けられた。また、地域によっては日本のようなしっかりとした教育を受けていないという現状も見聞き、体感した。2つ目は**教師は生徒の見本となる人間である必要があることを肌身に感じる事ができたこと**だ。これは前述した礼儀やマナーと通じる部分がある。今回四つ葉学院での生徒は小学生が多く、小学生たちは先生の素質を直観的に察知してしまうので、教師としてのみならず、人間として素晴らしい人でなければ教師は務まらないと感じた。これは小学生だけでなく、中学生、高校生でも同じことが言えると思う。3つ目は**生徒の指導の際には予測が非常に大切**であるということである。この具体例の1つとして机の上の整理整頓がある。授業中、机の上が汚いと生徒がものを落とし、それが他の生徒の所に転がっていく可能性がある。ここまでは恐らく多くの人が予想できると思う。だが、もし仲の悪い生徒の所に転がっていくと喧嘩に発展する可能性もあることも予測する必要があると先生の一人がおっしゃっていた。実際、私が指導している際にも似たような現象が見受けられることがあり、このようなことを予防するために生徒の行動を予測することは大切だと実感した。

● 印象に残ったこと

印象に残ったことは沢山あるが、その中の1つとして海外の学生と日本の学生の意識の違いがある。今回、ワシントン大学、エバーグリーン大学、ベルビューカレッジの学生等様々な学生に会ったが、**日本の学生に比べてやる気がある学生が多いと感じた**。私が会った学生の中では大学に遊びに来ている人は見受けられなかった。これは学生が感じる危機感の違いだと思う。その例の1つとして大学の進学の手やすさが挙げられる。アメリカの大学は日本の大学に比べて進学が難しく、学費も高いため、留年はできないという環境下にある。また日本とは違い、生活保護のような貧困層の救済制度がしっかり整ってないので自分自身のみが頼りであり、しっかりと勉強しなければいけないという意識が強いという見方も考えられる。やる気のある学生がアメリカに多いということがとても印象に残り、とても羨ましかった。

● インターンシップが今後どう活かされていくか

大きなことの1つとしては、私の人間としての成長のきっかけと成長を促してくれたと言える。今回のインターンシップで得た学びは紙の上の学びとは異なり、実際に体感した学びであり、しかも海外という非日常での学びであった。これは大学生が中々経験できないことなので、貴重な学びだったと考えている。このような経験を生かして、普通の大学生では中々思いつかない着想や日々の学生生活を送ることにより、より豊かな人に成長し、社会に貢献できるような人間になれるよう、日々努力を重ねていきたいと思う。

● 後輩たちへのメッセージ

若いころに様々なことに触れ、見聞を広げることは自分の興味関心や得手不得手がどの分野ではどうなのかを知ることができ、これは将来の人生設計において最も参考になることだと私は考えている（それ故に大人たちは本を読みなさいと言うと私は考えている）。大学生という期間は最も大人に近い期間であり、社会人にはない非常に沢山の時間が与えられている。この期間は見聞を広めるには絶好の機会である。**このインターンシッププログラムは学部生の頃には中々経験することが出来ないことを沢山経験する絶好の機会が詰まっている**。折角大学の長期休暇があるのだから、このような短期海外インターンシップに行くことも検討し、自身の知識見聞を広げてみることを強く薦めたい。自分自身を磨きたいという志向がある方は大歓迎なので、もし私で良ければいつでも相談に乗るので気兼ねなく連絡して下さい。私の連絡先はGLEPのグループの他、グローバル教育センターの職員の方に聞けば教えて頂けるはずです。

